



東北大学大学院国際文化研究科

同窓会会報 第9号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日：2011年4月6日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022)795-7556 FAX (022)795-7583 E-MAIL <dosokai@intcul.tohoku.ac.jp>

過去と未来へのまなざし

小林 文生

(国際文化研究科同窓会会長、ヨーロッパ文化論講座教授)

この度の東日本大震災によって被災された皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

国際文化研究科同窓会会報も、本来なら例年どおり3月末の同窓会総会の日に配付できる予定でしたが、震災の影響で遅れることになりました。

この未曾有の大災害で、国際文化研究科も含めて東北大学の建物や設備は各所で損傷を被り、新年度の学年暦を変更せざるを得なくなりましたが、もちろん、そのことによって教育・研究の遂行が滞るようなことはありません。地震の翌週に開催された部局長連絡会議においても、単なる復旧にとどまらず、ピンチをチャンスに転じて、復興とともに更なる発展を実現する、という東北大学の力強い決意を確認し、全学がこの姿勢を共有しています。前向きに、皆が心をつなげて力を合わせることで、必ずや私たちはこの難局を克服していけると確信しています。

いつもとは違って、学位記授与式も入学式もない年度の変り目ですが、旅立つ人も、それを見送る人も、また新たに入り来る人も、それを迎える人も、過去と未来の双方へのまなざしが一瞬交錯してとどまる非日常的な体験をすることに変わりはありません。ここでは、あえて、地震以前に戻ってこの一年間の活動の一端を振り返ってみましょう。

平成22年度、国際文化研究科では、講座改編後の新カリキュラムが開始して、より充実した教育を展開する一方、各専攻の研究プロジェクトが推進されて、それをもとにした公開講座や公開講演会のほか、国内外からのゲストを招待して講演会やシンポジウムも活発に開催されました。

中でも、イランのテヘラン大学からジェンダー研究者ヘシュマト・モイーニーフアル先生をお迎えして、イランの女性の社会的立場の現状についてお話を直接伺えたのは貴重な機会でしたし、韓国中央大学から朴銓烈（パク・チョンヨル）先生をお迎えして、特殊な埋葬の風習についてフィールドワークの成果をうかがったのは、2006年の「韓国文化への誘い」のとき以

来の研究交流の継続であり、懐かしい再会でした。また、科内の研究プロジェクトとして、北京大学で日本語・日本文化を研究している大学院生たちとその先生がたを招待して、本研究科の院生たちと合同の研究発表会を催したのは、今後の国際共同教育プログラムの開発への一歩となる事業でした。さらに、同じく科内の研究プロジェクトで、首都大学東京の西山雄二先生を講師として招待し、ヤミナ・ベンギギ監督の『移民の記憶』の上映とそれに続く討議を行ないましたが、あの白熱した午後の知的興奮は記憶に新しいところです。

今あらためてふりかえってみると、いずれの企画も、過去と未来へのまなざしに基づいて、他なるものの理解を問い直す機会となるものでした。それは、まさしく国際文化研究科の理念である学際的・総合的な教育研究の、基礎となる視点を養うのにふさわしいものだったと言うことができます。

これからも、私たちは一丸となって、さらに魅力ある大学院となるように努力してまいりますので、同窓生の皆様には、そのご活躍を通して、本研究科を国内外にアピールしていただければ幸いです。そしてこの同窓会を、さまざまな機会に同窓生が気楽に集う国際的な場として活用していただけるよう、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

第10回同窓会総会と後援会のご案内

このたびの東日本大震災で被災された同窓生のみなさま、またそのご家族に心よりお見舞い申し上げます。

3月11日に発生した大震災により本年度国際文化研究科学位記伝達式は中止を余儀なくされました。これに伴い、例年通り学位記伝達式後に開催を予定しておりました同窓会講演会および総会も中止せざるをえなくなりました。今後の対応につきましては、同窓会理事会において検討し、同窓生のみなさまにいずれお伝えしたいと存じます。

国際文化研究科同窓会事務局

第9回総会と講演会の報告

第9回総会を2010年3月25日にマルチメディア教育研究棟6階大ホールにて開催しました。総会に先立ち、山崎和美氏による講演会を開催しました。

講演会要旨

イラン女性による現状打破のための挑戦 —教育と映画を事例として—

財団法人中東調査会 専任研究員 山崎 和美
(イスラム圏研究講座博士課程後期3年の課程修了)

はじめに

イスラム圏研究講座で2008年3月に博士号を取得した山崎和美と申します。この度は、皆様の前でお話しする機会を頂き、心より感謝申し上げます。

私の専門はイラン地域研究で、20世紀初頭の教育と女性を研究対象としています。現在は財団法人中東調査会に研究員として勤務しており、イラン担当の現状分析と機関誌『中東研究』の編集を任されています。職場では政治、国際関係や安全保障などの現状分析が求められるため、自身の専門をどう生かすべきか模索する毎日です。

そのような中で、自分が専門としてきた20世紀初頭の女性たちと現在の女性たちの奮闘ぶりに共通性があることに気づきました。理想と現実とのギャップに苦悩しながらも、何とか自らの目指す方向に近づこうと奮闘するイラン女性たちの姿は、現在の私自身にも通じます。講演ではこのようなイラン女性の姿について、自身の研究や現在の業務と関連づけながらお話ししました。

I. 第10期大統領選挙

2009年6月、イランでは第10期大統領選挙が実施されました。以来、選挙結果に疑問を抱く改革派による抗議行動が発生して混乱が続き、イラン民衆は分断の危機に瀕しています。

一方で、選挙運動でも抗議行動でも、女性たちの活躍がクローズ・アップされ、注目を集めました。



II. 映画に見る現状打破のための挑戦

国内の混乱状況と人々の想いを代弁するような

イラン映画が、2009年末に上映されました。第10期大統領選挙とその後の騒擾を扱う「グリーン・デイズ」と、禁じられているアンダー・グラウンド音楽のミュージシャンたちを題材とした「ペルシャ猫を誰も知らない」です。2006年の「オフサイド・ガールズ」を観た時と同様に、現状打破のために奮闘し努力するイラン民衆、特に女性と若者たちのパワーを感じました。しかし、困難を抱えつつも明るさと希望が垣間見えたこの作品とは違って、今年の2作が訴えかけるのは、監督や登場人物たちの深い悲しみと人々が直面する現状打破の困難さでした。

III. 女子教育推進のための闘争

一般的に女子公教育の整備とその発展の開始は、レザー・シャー（在位：1925-41）の即位後、特に彼のトルコ訪問（1934）以降と見なされる傾向があります。こうした見方はその契機を、近代化と西欧化誘示を目的とするシャーの女子教育振興策に見ています。これは1930年代後半以降に関しては事実ですが、20世紀初頭においても女子学校教育が発展していたことを見過ごしています。学校に関する統計資料や女子教育発展を声高に求めた「女性たちの声」が検証されていないためようです。以上のことからこれらの資料を分析し、女子教育必要論の論拠と育成を目指した女性のあるべき姿に関する議論、について研究を進めてきました。

むすびにかえて

女子教育の権利の要求という女性活動家たちの「声」からは「近代的イラン女性」という新しい理想的女性像を読み取ることができます。「欧米由来の近代的な衛生学・家政学の知識を有する家庭の主婦として母・妻という役割を果たし、愛国心を有し、イスラームに根ざした適正な道德心によって子どもや夫を養育する女性」というイメージです。

女性活動家たちは女子教育の実現を望みましたが、現実には、女性の教育のみならず自己表現すらままならない伝統的な社会規範に阻まれ、保守的な伝統主義者たちの激しい攻撃に晒されました。彼女らは女子教育の正当性を訴え女子教育推進を目指して、様々な戦略を講じました。「近代的イラン女性」はそのような戦略の中から生まれた、とも言えるのです。

女子教育をめぐる擁護派と反対派の議論のせめぎあいに関しては、今後さらなる検証が必要です。ナショナリズム、イスラーム、フェミニズム、西洋の近代合理主義といった様々な要素が複雑に絡み合い、相克し、混合されて形作られてきた、女子教育に関する様々な議論と「近代的イラン女性」について、考察を深めていくことが今後の研究課題です。最後に、長年にわたりご指導下さいました国際文化研究科の先生方に深く御礼申し上げます。

第17回国際文化基礎講座の報告

第17回国際文化基礎講座(平成22年11月)では「装いの文化史 — 変化する同一性 —」と題して、本研究科の3教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講義概要をご紹介します。



江戸の異性装 ——八犬士と弁天小僧——

石川 秀巳
(アジア文化論講座教授)

〈異性装〉を取り上げるとき、ジェンダー「性」の問題に眼を向けがちなのだが、外面を覆い別の存在となる変装・仮装の一類型、過剰な〈装い〉として眺めてみたい。登場人物に〈異性装〉を行わせる作者の意図、作品上の意義が何であったかのほうに関心があるからである。

河竹黙阿弥作の歌舞伎『青砥稿花虹彩画』(1862初演)三幕目「浜松屋店先の場」。武家娘に変装して浜松屋から大金を騙り取ろうとした弁天小僧菊之助が、正体を見破られ、首から上は娘のままで半裸になる場面がよく知られている。性の区別を混乱させる女形の存在性に加え、男性である役者が女性として登場しつつ、実は女性ではなくて女装した男性であった、という眩惑。だが、弁天小僧は、若衆→武家娘→無頼漢と変容を繰り返す犯罪者と見るべきであり、女装のみを特化するわけにはいかない。女装そのものよりも、女装の解除にこそ眼を向けるべきではないか。作品世界において、変装は解かれなければならない。

店先の場続く「浜松屋奥座敷の場」では、弁天小僧が浜松屋の息子であったことが判明する。そして、神社の祭礼に父親とはぐれて以来の弁天小僧の境遇の変化も。盗癖のある不良少年、無頼漢、盗賊、殺人者……そうした生を重ねながら、「幸兵衛倅幸吉」の書付けが入った巾着袋を大事に持ち続けてきたことから、次のように推測するのは唐突だろうか。弁天小僧

は、「自分は何者なのか」という疑問(欲求)を懷いて生きてきたのではなかったのか、と。浜松屋店先での「知らざあ言つて聞かせやしよう」の〈名のり〉に重ねて、四幕目「稲瀬川勢揃い」の場でも〈名のり〉を反復するのは、その欲求と呼応する設定にちがいない。父のために千鳥の香炉を取り返そうとしたのは、回復された「幸兵衛倅幸吉」としての行為なのである。

曲亭馬琴の長編読本『南総里見八犬伝』(1814～42)に二人の女装犬士を登場させるのは当初からの予定だった。犬塚信乃の女装は、「男児なれば女の子とし。女の子には男名つけて。やしなひ育れば恙なし」との俗信に基づくとされた。そこに両性具有的な人物を描こうとしたと作者の意図を解することはできない。九歳になった信乃は、筋骨逞しく、「尋常なる人の子が。年十一二になるものより。身の丈一丈高かるに。なほ女服被せられて」といると、肉体と女服との間の違和を明白に語っている。ここでも、女装それ自体より女装を解くことにこそ意味があったと見るべきだろう。父の自死に際して、信乃は犬士の徴としての数珠玉と牡丹型の痣を獲得する。女装からの脱却は犬士としての再生を視覚的に象徴するものだった。大塚の郷土大塚番作の子という仮装(女装)の元に生きていた犬塚信乃は、仮装を脱ぎ捨てて犬士としての本来の運命に身を投ずる。



もう一人の女装犬士犬坂毛野は、一族の仇の追及から身を隠すために女田楽に身をやつした。女と見まごう美しさを見せ、同性愛的雰囲気をも漂わせてもいるけれども、仇を追って、女田楽、乞食少年、居合拔きの芸人と次々に姿を変えつつ登場するところからすれば、むしろ「変装の犬士」と見るべき存在なのである。封印されてきた本来の姿は仇討ちの場で回復され、そこから八犬士の一人としての生が始まる。

他の六犬士も、女装こそ見せないものの、犬塚信乃・犬坂毛野と同様に、そして弁天小僧と同様に、自己の発見をひとつの到達点とする物語展開の中を生きているのである。

イングランドに渡ったイラン人 —西洋近代との邂逅の現場から—

黒田 卓
(イスラム圏研究講座教授)

7千万の人口を擁し日本の約4倍半の国土面積をもつ中東の大国、イラン。現在しかし、イスラーム一辺倒で国際社会からも孤立した厳格で閉鎖的なイメージでとらえられがちである。あたかもグローバル化に背を向けるシンボルのごとくに、である。

そこで、この講義では、日本の西洋との出会いより半世紀余り前に、イラン人エリートが西洋近代とどのように本格的に接触を始め、どう認識したかを探ることを目的に、出自や旅行目的は異なるがいずれも19世紀初頭にイングランドに赴いた3人のイラン人に着目し、彼らの残したペルシア語滞在記録に表れる彼らの異文化表象を考察した。

イランで内戦状態を収めたガージャール朝の登場、18世紀後半から19世紀初めまでのイランをめぐる英仏露の動向といった国内外の歴史背景を概観した後、最初に、父がイラン出身でインドのムスリム地方君主に仕え、自らもインド在住イラン人と自覚していたアブー・ターレブ・ハーンとそのヨーロッパ旅行記『求道者の旅路』を取り上げた。ペルシア語刊本(1812年刊)より前に英語翻訳が出版され著名となった本書成立の背景を考えると、イランとインドにまたがるイラン人移住者のネットワークの存在や彼らの知識層の生み出した豊かなペルシア語テキストの残存(しかし近年まで「故国なきテキスト」として閑却されてきた)を無視することができない。こうした事情を踏まえて、1800年1月から2年半にわたる彼のイングランド滞在中の観察記録を見てみると、コーヒー・ハウス、クラブ、新聞などの近代文明の所産や自由な法、議会制度を賛嘆するとともに、他者の習慣や宗教法を無視するイングランド人にたいしムスリムとしての強い矜持をもち、批判的な見地を忘れなかったことも注目される。

次に、イギリスとの友好同盟本条約交渉のために派遣されたイラン使節団の大使を務めたアボル・ハサン・イールチーとその旅日記『驚愕の書』を紹介した。1809年5月から11年3月までの滞在中に、アボル・ハサンは国王や女王はじめイングランド政界、社交界の有名男女と交遊し、その動静はエキゾチックな装いや容姿とも相まって当時の新聞でも大きく報じられ、ロンドン子の噂の種になった(肖像画参照)。彼は日記に使節団が公式訪問した王立オペラハウスや東インド会社、イングランド銀行などの詳細なデータを残してはいるものの、アブー・ターレブに比べると外交使節としての立場もあつてか、ほとんど批判的なスタンス

は見受けられない。

1815年10月にイングランドに到着し4年近く滞英した留学生第二陣(総勢6名)は、前述の2者とは対照的にほとんど脚光を浴びることもなかった。彼らのうちの一人、ミールザー・サーレフ・シーラズイーが記した『旅行記』によれば、留学生に厳しい行動制限を課したり適切な教育環境を提供しなかったりとイギリス政府が留学生にたいし冷淡であったのは、留学生が本国で社会的地位が低い若者であったことに加え、より根本的な理由としてはイギリスがナポレオン戦争終結後にイランの地政学的な価値にさほど重きを置かなくなっていたからであった。そうした冷遇にもかかわらず、彼らは持参したショールを売り払って糊口をしのいだり個人的な伝手を頼って教育の場を探し出したり、華やかな社交界には目もくれずに、医学、軍学、技術、語学などのどちらかといえば実学的な知識技能の習得に励んだ。とりわけサーレフ・シーラズイーは、自らの『旅行記』の中にイングランドの歴史や同時代のヨーロッパ情勢に関する著作の翻訳を試み、故国の将来に役立てるべく見習いをしながら印刷術を修得した。帰国後、彼は皇太子付きの外交顧問として活躍するかたわら、イラン初の官報の創刊に携わり、後世イランにおける「新聞の父」として知られるようになった。印刷術や新聞刊行だけでなく、彼が切り拓いたペルシア語散文の平易化や同時代世界情勢に関する知見もまたやがて訪れる近代化への動きの素地を整えたといえよう。

彼らのイングランドでの観察記録から窺えるのは、彼らにとっての新奇な発明や施設に目を見張るだけでなく、イングランドにおける自由や議会制度などその社会を動かす制度への洞察を示していることである。しかもそれらの記述は手放しの礼賛に満ちていてわけではない。むしろ、意想外にも、彼らは特殊な場合を除き、宗教的信念や習慣、また「装い」をすら変えようとしなかった。言い換えれば、異文化の境遇に身を置きながら、最新の知識・制度・技術に貪欲な関心を抱きつつも、自己の同一性(アイデンティティ)には大きな変容を被らなかつたといえるのではあるまいか。



アボル・ハサン・イールチー肖像画(トーマス・ローレンス作)。イラン外交使節は見る側であると同時に見られる側でもあった。

中国の「社会主義市場経済」を どう理解するか —企業の変化を手がかりにして—

葉 剛
(科学技術交流論講座教授)

1.はじめに

中国の自称した「社会主義市場経済」は一体何か。マスコミは、中国がまさに社会主義体制だとよくいつている。一方、中国に駐在しているビジネスマンによると、今の中国が資本主義そのものだと揶揄されている。1980年代に入ってから中国は確かに大きな変化を現している。特にその経済システムが急激に変化してきたことは否定できない。中国は如何なる形で変化してきたか、またその変化が何を意味しているかを理解するのに当たって、企業の変化がむしろその一つの手がかりになるといってよい。ここで、文化、価値観に密接に関連している企業運営の制度や組織に焦点を絞って、中国の変化を解き明かしていく。

2.急がれた「社会主義」化

1952年に毛沢東が「一化三改」という共産主義過渡期（「社会主義」）の任務を提唱してから、中国は旧ソ連の経済制度をモデルにして全面的に生産手段の国有化、経済活動の運営の中央集権化にメスを入れ始めた。

1953—57年の第一次五ヵ年計画期において旧政府の財産、旧政府の官営事業を完全に国有化し、さらに国家資本の参入を通して、徐々に私有商業企業、私有工業企業を国家所有の傘下におさめた。それと同時、内戦後の経済復興や朝鮮戦争をきっかけに中央政府は、重要な生産財の生産、流通、購買の主導権を手に入れた。

そして、全国総動員の「大躍進」の失敗から教訓をえて、工業生産立地の分布調整の「三線建設」を遂行した。この巨大な国家プロジェクトは、沿海地域の既存の経済資源を内陸に見事に移動させた。よってこの「三線建設」を通して、中国は中央集権的計画経済システムを仕上げたといえる。

一方、国民経済の再生産活動を担う企業は、その財産の所有者が国家であり、その所属が中央政府、あるいは地方政府の専門行政機関にある。企業の生産、雇用、賃金、購買、投資が全て、それらの所属する行政専門機関によって決められる。生産経営活動に関する意思決定は企業が全くできない。こうして、中国は、生産手段の国有化と生産、流通、購買の統制によって、企業をただの生産工場や行政機関の一機能部門にした

といっても過言ではない。

3.市場と自由競争の復権

生産手段の国家所有と中央集権的計画経済の下で、希少な経済資源が集中的に経済開発に投下されたことは確かに短時間的に国民経済の回復、なおかつ国内後進的な産業構造の転換を促した。だが、経済の更なる発展に必要な市場メカニズムの復権、自由競争原理の容認が無視されたゆえに中国の経済が行き詰まったほかはなかった。

市場経済への移行は、1970年代末ごろ農村部から始まった。生産請負制度は農村部で普及しただけでなく、徐々に工業部門、さらにその他の経済部門に拡大していった。ようやく、92年にマクロ的に国家がコントロール機能を果たすと同時に、市場が経済資源の配分を行う主要な装置となることが強調されるようになった。そして、国民経済再生産の担い手も公的所有の国有企業と集団企業から国有企業、個人企業、家族経営、外資企業へと変わってきた。つまり、中国は自ら生産手段の公有制度と中央集権的計画経済制度を解体した。

4.おわりに

こうした企業の変化からみると、「社会主義市場経済」というのは本質的には、資本主義、あるいは自由主義諸国に非常に似ているといえる。毛沢東の言い分によれば、生産手段の公有化、経済活動の中央集権的な計画化を通して、「社会主義」に到達すると言うならば、今の中国の自称した「社会主義市場経済」の「社会主義」はむしろ一種の「飾り（カザリ）」、あるいは「装い（ヨソオイ）」にすぎないのではないかとと思われる。



国際文化研究科主催公開講演会・関連行事の報告

今年度に研究科が主催しました講演会、および研究科に関連する行事をご報告します。一つは昨秋に開かれました2つの主催講演会、二つ目は昨年12月に開催された講演会、三つ目は科長裁量経費による共同研究プロジェクト活動です。それぞれの行事で活躍されました3人の教員から行事の概要を以下にご紹介いただきます。

国際文化研究科主催講演会報告

小野 尚之

(言語コミュニケーション論講座教授)

研究科が主催した講演会が昨秋2つ開かれました。これらはいずれも研究科が国際交流を積み重ねてきた大学から講師をお招きし開催したものです。以下にそれぞれについて、簡単に講演会の様子を報告いたします。

まず1回目は2010年10月19日に「イラン女性の現在」という演題で開催されました。この講演会では、テヘラン大学世界研究学部助教授のヘシュマト・モイーニーファルさんを講演者としてお招きし、日本語同時通訳もつけながら1時間半余りにわたって、イラン女性の現状と彼女らが直面している問題について語っていただきました。

テヘラン大学女性問題研究センターのメンバーでもあるモイーニーファルさんは、自身の行った調査データも交えながら、おもに3つの角度、つまり教育、就業、政治参加から女性の現状や問題を説明されました。教育の分野では、1979年のイラン・イスラーム革命の前後の時期を比較して、農村部での女性識字率の顕著な向上があったこと、高等教育への女性の進出が目覚ましいこと（最新のデータでは、大学進学者に占める女子学生の比率が60%を超えた）などを指摘しました。こうした女性の高学歴化にもかかわらず、労働市場に占める女性の割合は13%で、これは経済困難に伴う失業率の高さに加えて、女性の就労に対する低い評価や高学歴の男性との出会いを求める動機にもよると述べるなど、興味深い見方を披露しました。

また政治参加の面では、国会レベルでの女性議員数はまだ少ないものの、彼女らが主導した女性問題に関連する立法活動、地方評議会レベルでの女性代表の増加（2005年選挙で全体の11%）のような事例を紹介しつつ、同時にマクロ政治や政策決定が行われる部署への女性の登用が進まないことなど、多くの問題が山積していることも指摘しました。最後に、2005年のアフマディーネジャード政権の誕生により、女性の家庭における役割が強調されだしていることも付け加えられました。

核開発問題などの話題ばかりが先行しがちで、日頃窺い知る機会の少ない現代イラン女性の動向への関心の高さも手伝ってか、当日は一般の方々も含めて会場が満席状態になる盛況ぶりでした。

続いて2回目は11月29日に韓国の中央大学から朴銓烈（パクチョンヨル）教授を招いて、「草の墓と砂の墓—南島の二次葬の現場から」と題して開催され

ました。中央大学と東北大学は、2008年3月に大学間学術交流協定を締結していますが、この協定締結に際し中心的な役割を果たした本研究科は、協定に先立つ2006年11月に中央大学で開かれたシンポジウムに本研究科の教員が講師として参加、また、2008年1月には中央大学から教員、学生が本研究科を来訪し「日本文化共同研究発表会」を開催するなど、活発な交流活動を継続してきました（詳しくは、国際文化研究科のウェブサイトをご覧ください）。今回の講演も、そのような両校の交流の一環として、朴教授にご快諾いただき実現したものです。

朴教授は、民俗学、民俗芸能を専門とし、中央大学で教鞭をとる傍ら、日本国立民族学博物館研究員、国際日本文化研究センター研究員、韓日文化交流会議委員、日本茶道裏千家研究員などを歴任し、また、韓国日本歴史文化学会、韓国民俗学会の会長も務め、韓国の日本文化史、民俗学分野において指導的立場にある研究者です。

今回の朴教授の講演は、自身が行ったフィールドワークに基づいて、韓国の南部島嶼地域で行われている「草墳」という埋葬様式と、日本の与論島で伝統的に行われてきた埋葬の様式を比較するというとても興味深い内容でした。韓国の草墳とは、遺体を土に埋める本葬の前に藁葺きの家の形をした臨時的な墓に2、3年仮葬した後、それを解体して洗骨した上で、最後に土に埋めるという風習だそうです。一方、与論島では、火葬の制度が入る前は、遺骸を洞窟に埋葬したり、棺に入れて埋めてから暫くたった後、遺骸を掘りだし洗骨し、また埋めるという二次葬が行われていたそうです。両地域の様式には表面的には違いが見られますが、本葬の前に遺骨を洗う「洗骨」を行うという重要な共通点が見られることなど、二つの地域が同根の文化をもつことをうかがわせる証拠があることを民族学的な視点から具体的に示しました。

当日は、用意した席が足りなくなり、椅子を補充しなければならぬほどの盛況ぶりで、本研究科の教員、学生のみならず他研究科の学生や一般の方々の多くの参加がありました。



ASA 前会長ゲインズ氏講演会

竹中 興慈
(アメリカ研究講座教授)

2010年、暮れも押し迫った12月17日、アメリカ研究講座主催でASA (American Studies Association) の前会長、Kevin K. Gains氏(現ミシガン大学歴史、アフロアメリカンおよびアフリカ研究学部)を国際文化研究科にお招きして、講演をしていただきました。東京の友人からゲインズ氏が来日されることを聞いていて、機会があればぜひ仙台においでいただき、院生の皆さんにアメリカの最先端の研究状況を聞いて欲しいものだと思っていたところ、幸いにして科長裁量経費をいただけることになり、講座一丸となり準備をして、急きょ実現することになりました。

氏は“Black Studies: Its Past, Present and Future”という演題で、パワーポイントも使ってアフリカ系アメリカ人の歴史を概観したうえで、ブラック・スタディーズがアメリカ合衆国のなかで果たしてきた大きな役割についてまとめ、氏の研究によせる思いを語られました。

ブラック・スタディーズは合衆国において、歴史的、文学的、社会科学的に、学問そのものを変化させ、学問の基準を大きく広げ、新たな歴史を切り開き、アフリカン・ディアスポラを分析の鍵念にした。しかし、その将来は、学部の学生たちが高等教育機関でブラック・スタディーズを学ぶ機会をいかに増やしていくか、そして大学院での研究をいかにしやすくしていくかにかかっている。高等教育機関で勉強したり、公立大学におけるアフーマティヴ・アクション(積極的差別是正政策)の目的を達成したりするためにはますますコストがかかるようになってきているが、合衆国の公立大学の将来が不安定になっているのと同様に、ブラック・スタディーズの将来は不安定になっている。氏はこのように、最後に研究環境悪化への危機感を漏らし、講演をおえられました。

講演後、院生たちから、講演内容に留まらず、アメリカ研究一般にも関係する質問がたくさん出され、活発な議論が行われ、大変有意義なひとときを過ごすことができました。

研究科共同研究プロジェクト 「世界のマイノリティ比較研究」

寺本 成彦
(ヨーロッパ文化論講座准教授)

国際文化研究科の共同研究プロジェクト、「世界の(エスニック)マイノリティ比較研究」の主要行事として、2011年1月22日にヤミナ・ベンギギ監督のドキュメンタリー映画『移民の記憶』(1997年、フランス)

を上映、講師に西山雄二先生(首都大学東京・准教授)をお呼びし、一般市民に公開して討議を行った。まず西山先生は「フランス近代植民地主義におけるアルジェリアの記憶」という題目で映画の歴史的・社会的背景を詳細に浮き彫りにされた。次いで、インタビューを受けているマグレブ系フランス人の語る主体としての「人称」の問題および、移民の「移動と記憶」の問題を明解に説かれ、参加者は映画を通して垣間見たフランスの移民問題についての理解をさらに深めることができた。

今回の研究科行事は、第一専攻の講座教員一名ずつが参加して企画・運営した。講座間の連携と協働作業のもとに、一般市民に開かれた場で「国際文化学」の理念の一端を示すことが目指された。この度の上映会・討議は、実は「連続プロジェクト“不可視の隣人たち”」として一昨秋に立ち上げた企画の第二回目にあたる。第一回目として昨年4月24日、韓国のドキュメンタリー映画『ウリハッキョ(Our School)』(2007年)の上映とパネルディスカッションを既に行っている(アジア文化論講座主催)。北海道朝鮮民族学校の児童・生徒たちの学園生活を活き活きと描き、本国でも高い評価を得た『ウリハッキョ』は、「まず日本人にとって身近な“隣人”である在日コリアンの現状理解から出発しよう」という私たちの意図から選んだものだった。まだ記憶に新しいことであるが、企画が進みつつあった頃、ちょうど日本政府による民族学校の学費無償化凍結なる政策決定がなされたため、マスコミその他思いもかけぬ方面からの注目も集め、正直戸惑ったことを思い出す。

それに比べて今回取り上げた映画は、第二次大戦後30年間に渡ってフランスにリクルートされて社会の底辺で働いてきたマグレブ三国(アルジェリア、チュニジア、モロッコ)出身の家族の記録であり、「日本の民族学校の学費を無償化するか否か」といった時事的な緊迫感を持つてはいなかった。さらに第一回目の『ウリハッキョ』とは、場所や歴史的条件がずいぶん異なるのは言うまでもない。しかしながら、国策に翻弄される形で新天地を求めてきた移民労働者のコミュニティが、“異郷”でいかなる無理解・偏見に遭遇したのか、人間としての尊厳が時としていかに無視されたのか、さらには移民二世以降の若い世代が自らの“生まれ故郷”でアイデンティティーの危機を抱えながら、いかに自分らしく生きる道を模索しているのかといった普遍的な問題圏では、在日コリアンの置かれた状況と多重的に響き合っていたと思われる。

参加していただいた一般市民の皆さんの関心の高さもあり、成功裡に上映会・討議を終えることができた。今後も何らかの形で、次なる“不可視の隣人たち”との遭遇を準備していきたいと考えている。

事務局より

① 同窓会メールマガジンについて

事務局では会員の皆さまに興味をもっていただける情報を随時お届けしたいと思います。また、会員の皆さまからもメールマガジンに掲載してほしい情報などをお寄せください。

② メールアドレスについて

メールアドレスを変更された方や未登録の方は次のアドレスにご連絡をお願いします。メールアドレスは厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

国際文化研究科同窓会〈dosokai@intcul.tohoku.ac.jp〉

③ 同窓会ホームページ

これまでの総会、理事会、会報、メールマガジンなどの情報を掲載していますのでご覧ください。

<http://www.intcul.tohoku.ac.jp/dosokai/>

④ 同窓会懇親会について

事務局では会員の要望に基づき懇親会を開催したいと考えていますので、開催希望などをお寄せください。

⑤ ご意見・ご提案等を！

同窓会についてのご意見・ご提案等がございましたら事務局までお知らせください。宛先は本会報の題字欄に示してあります。また、ご住所・勤務先・メールアドレス等に変更がございましたらご連絡願います。お寄せいただいた個人情報は厳密に管理し、同窓会・研究科からの連絡をお送りする目的にのみ使用します。

⑥ 会費・寄付金の納入のお願い

会則第11条第1項及び12条に基づき会員の皆さまに会費等の納入をお願いいたします。

○ 入学、進学及び編入学者で未納の方

(1) 国際文化研究科前期課程の学生：6,000円

(2) 国際文化研究科後期課程の学生：

編入学者： 8,000円

進学者： 6,000円

○ 上記以外の方（修了生、在学生、現教職員・元教職員等）には、ご寄付という形のご支援をお願いできますと幸いです。

○ 会費・寄付金とも、郵便局からお振り込みいただくか、国際文化研究科教務係窓口へ直接お納めください。

郵便振替口座名称：国際文化研究科同窓会

郵便振替口座番号：02220-5-66621